

伴 二 兵

終 炎

サイマル出版会

伴
二
兵

終 炎

サイマル出版会

(著者紹介)

伴 二 兵
ばん に へい

本名・井上満 1915年群馬県に生まれる。37年
早大政経科卒業後満州に渡り、満州国通信社入
社。戦時中、同盟通信社出向、陸軍報道班員と
して従軍。

戦後共同通信社に復帰、社会部・文化部などを
経て、68年退社。

現住所・~~熊本県宇都宮町122~~

終 炎

無断転載を禁ず／検印廃止 ㊦480

一九六九年六月三〇日 初版発行

著 者 伴 二 兵

発行者 村 松 増 美

株式会社 サイマル出版会

(発行所)

東京都港区赤坂一ノ二ノ四五
山王第一ビル
電話 (三三)五八二四二二一(代)
振替 東京五二〇九〇番

印刷 株式会社太平印刷社

製本 森川信三郎
有限会社井上製本所

井上 幸治

©1969 THE SIMUL PRESS, INC. Printed in Japan

終
炎／目
次

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
大佐と娘	ある感傷	カーキ色の鞆	沖縄戦線	離別	戦争男	台北の夜	南台風景	戦争と温泉	その前夜
.....									
七	九	九	六	五	五	五	六	三	一

11	螢		一〇
12	月夜		一三
13	台湾脱出		一七
14	遭難		二四
15	海の魔性		二四
16	異国の母		二五
17	上海の町角		二六
18	高性能爆弾		二七
19	東京暮色		二八
	あとがき		

1 その前夜

昭和二十年（一九四五）八月十四日の午後――

その日も、関東一円はうすい雲におおわれていたが、雲間から射しこむ陽ざしはかなり強く、むし暑かった。

周三の乗った電車は、赤城山の前面のなだらかな裾野を迂回するように、東に走る。小さな駅に降りた周三の前後に数名の客が続いて、閑散となつた車内のその電車は、にぶい警笛を残して走り

去つた。

その小駅には、周三に古い思い出がある。

周三の故郷にあたる落合村は、駅から北へ約五キロさかのぼつた山村である。

中学生のころ、毎日、その道のりを自転車で一気にかけて下り、駅に自転車をあずけて前橋に通つた。駅員ともしぜん顔見知りになつて、いちいちポケットからパスを出して見せる必要もなく、さつと胸を張つて改札口をす通りするのが得意だつた。

あれから十年の歳月が流れている。その十年間は、ほとんど戦争だつた。

いま走り去つた電車の軌道を踏切つて、いっしよに降りた人たちが、改札口と出口をかねた出入口の方へ黙々と歩いた。どの顔も汗ばみ、疲れていた。周三の前をゆく女は、はいているモンペの尻が不必要に大きくたるんでいて、背負つた幼児

は、首が折れるほどうしろにそり返ったまま、口をあけて寝入っている。真夏の陽ざしが、まともに幼児の顔を照らしていた。

駅の建物は、昔ながらに変わっていない。ついぞ手入れをした様子もなくて、手すりの木目が手垢で黒ずんでいる。

年老いた駅員が、けだるそうな手つきで切符を受けとる。二、三人いる駅員の顔はみな周三の知らない人たちで、かつて知り合いの、あの若い駅員の姿はみられなかった。戦場にかり出されているのだろう。あるいはもう戦死しているのかも知れない。

道は、駅から人口五千ばかりの田舎町をぬけて赤城山麓に続いた。

この町も、かつては近在の農村からの買いもの客で、ささやかな賑わいがあった。いまは、両側の店先もさびれて、商品らしいものも見あたらない。ときおり砂ほこりの舞いあがる路上を、まば

らな人影が無表情に通りすぎる。町はずれのケヤキの大木の繁みで、蟬たちだけが勇ましく鳴いていた。

落合への道は、この辺からだだら坂となり、部落と林を縫ってゆく。

部落のはずれの一本松を背にして、一軒の茶店がある。ガラス戸の一枚一枚に十字の紙が張りつけてあるのは、空襲のさいの爆風よけなのである。

周三は、半開きになっているガラス戸の合間から、声をかけてなかに入った。

家のなかはしんとして、だれもいなかった。駄菓子箱が並んでいるが、なかは新聞紙が敷いてあるだけで、ガラスの蓋がほこりをかぶっていた。ただそのかたわらに、メンコやタコといった紙製品の子ども玩具だけが、うず高く並べてある。タコの桃太郎が犬猿を従えて、冲天をにらんでいるのが、あたりとおよそ不釣合に鮮かな色彩だ。

周三には、ここへ来るまでは淡い期待があった——焼鰻頭である。

竹の串に、す鰻頭を五個ずつ刺して、炭火で焼き、それに甘い味噌をつけて食う。それは上州名物のひとつに数えられていた。四季を通して売られていたが、とくに寒い季節がうまい。

中学校からの帰り道、周三はよくこの店に立寄った。炭火でカニ色になった鰻頭の肌に味噌がしみ込んだのをほおぼると、体がぼつとほてる。その勢いで、北風に向って自転車のペダルを踏みしめるのである。

長い外地生活のおりふし、故郷を想って、まず頭に浮ぶのがこの焼鰻頭だった。

いま見れば、そのころ見なれた店先の四角い火鉢も見あたらない。戦争はすべての物資を食いつくすのだ。期待が甘すぎたといえはいえるが、万を一を夢みたばかりのことなのである。

周三は、がらんとした店のなかを見まわしながら、上りがまちに腰かけ、ボタンをはずして体の汗をふいた。

裏口に人の気配がして、白髪の老婆があらわれた。ふり返った周三は、たしかに見おぼえがある。だが、ことさら声をかけずに、にっと笑いかけた。

老婆は、のぞき込むようにして、しばらく見えていたが、「あーれ、落合の周ちゃんじゃねえかね」と、とんきような声をだした。

「うん。おばさんも達者で結構じゃない」と世辞をまじえたものの、女の変りように驚いた。周三がこの店先を通ったころは、髪も黒かったし、顔もふつくと、中年女のたくましさがあった。十年はたしかにひと昔であつた。しかも戦争は、それよりはるかに長い年月の重みとなって、人びとを疲れさせた。

「周ちゃんのこたあ、よくラジオで聞いたがね。西南前線基地可児報道班員発……西南基地って、

「どこだんべさあ。ずいぶん遠いとこだったんべのお」

老婆は、ひとりごとのようにつぶやきながら奥に消えた。

ふと見ると、鴨居に軍曹の正装をした若者の写真が掲げてあるのが目についた。

写真の主は、老婆のひとり息子で、周三と同年輩の、たしか正治といった。老婆には子どもがなかったので、遠縁の双子のひとりを養子にしたはずである。周三は、焼饅頭を食いながら、よく正治と将棋をさした記憶がある。

老婆が、茶道具を持って、周三のわきにべたりと坐った。

「見てやってくんねかい。正まさの野郎戦死しちゃったがの。周ちゃんたあ、たしか同じ年じやなかったんだっけかさあ」

写真を見あげる老婆の眼尻に、白いヤニがにじんでいた。

「どこで」

「ノモンハンだかの」

太平洋戦争だとばかり早合点したのは、周三の迂闊だった。思えば太平洋戦争、日支事変、ノモンハン事件と、実に長い年月の争歴が続いたのだ。

老婆の愚痴がはじまって、周三が返答にこまっていたとき、一台の荷馬車が通りかかった。

「よお、源やん。白川へのぼるんかい」

老婆の声に、馬の手綱をとっていた小柄な男がふりむいて、「ああ」と答えながら馬を止めた。

「落合の周ちゃんが居るんだがの。乗せてつてやつてくんねえかい」

白川というのは、落合からさらに北へ三キロほど登った赤城山麓の部落である。

「そうかい。そりや珍しい人だ。帰り車だから、かまあねえよ」と男は首に巻いていた手拭を取って、顔の汗をふいた。男は周三のことを知ったふうな口ぶりだが、周三には記憶がなかった。

周三是、老婆にあいさつもそこそこに、「お願いします」と急いで車にとび乗った。

行く手に、赤城山が淡く雲をかぶって近い。まんなかに尖った荒山、その左が鍋割、右が長七郎岳。荒山と長七郎の間に、最高峰の黒松が見えるはずだが、雲でかすんでいる。山を見つめてみると、童心がよみがえってくる。

馬車は、部落をぬけて林の山道に入る。男が、なにかと戦争のことを話しかけるのだが、いちいち答えるのがわずらわしかった。

荷台に仰向けに寝て眼をとじる。轍のゆれるままに身をまかせていると、蟬しぐれが高く低く、波のようなリズムとなつて耳を襲う。ナラの梢をもれるにぶい陽ざしが、暑さを感じさせないほどにさわやかだった。

——故山に帰る——ずいぶん久しい間、ついぞ味わったことのない安らぎである。

道が林をすぎたところで水田がひらけ、その向

うのこんもりとした森を背景に点在する部落が、落合村である。青々とした稲がすでに三十センチほど伸びていて、田の草を取る人影が青田をいほどつていた。

村をめぐる森のなかで、ひとときわ高くそびえる杉の木が目じるしで、周三の生家は村では旧家に属していた。

庭先に炉があつて、大きな釜が二つ、もうもうと湯気をたてていて、海軍の兵士が数名、まわりになむろしている。奇妙な光景だった。近づいてみると、釜のなかには木の根がほうり込まれて、表面に油がたぎっているのである。

兵士たちは、うさんくさそうに周三を見ていた。家のなかに人影はなかった。台所のひと抱えもある大黒柱は、いまでも色つやよく、あめ色に輝いている。周三が手をふれると、ぺつとりと冷たかった。大きな三毛猫が、不意の侵入者に身構えて眼をすえている。

周三は、勝手知ったそぶりで座敷に上がり、縁端に出て大氣を吸った。すでに暮方近く、陽は西の森陰にかかつて、ヒグラシが冴えざえと鳴いていた。

野良姿の男女の一団が、庭先を入ってきた。

「珍しいお客だな」と笑いながら声をかけた先頭の人が、父の庄作である。そのあとから、弟の英治、それに女がふたり、以前からいた作男の顔もあった。

兵士が知らせにいったのだろう。女のひとりはず妹のユキにちがいない。地味な仕度はしていてもわずかに童顔のおもかげを残して、美しい娘に成長していた。

「周兄ちゃん、ずーっと丈夫だった？ 近ごろちつともラジオで名前をいわなくなっただ、とても心配してたん」

ユキのはにかんだ言いぐさが、兄妹の気安さをこえて、ひとりの娘を感じさせた。

もうひとりの女が、周三の前にきて、最敬礼したまま、何か口のなかでいつているのだが聞きとれない。

無精ひげの英治が、照れくさそうに「こいつが、女房の妙子だよ」と紹介した。

周三の兄弟は、上にふたりいた。長女は隣村に嫁にゆき、長男が当然家を継ぐはずだった。周三は小学校の担任教師から父への助言もあって、当時この村では珍しい中学校から、東京の大学へ行くことになった。

ところが、周三が東京に出て間もなく、結婚式を間近にした長男がぼっくり死んでしまった。順序からすれば周三が家業を継ぐならわしたが、周三が百姓を嫌ったので、当時農学校一年になったばかりの英治に言いふくめて、周三は故郷を離れる身となったのである。

数年前、たしか周三が南支戦線に従軍しているころ、英治の結婚を知らせる便りをもらったおぼ

えがある。

妙子にはまだ子どもがないらしいが、ひかえめな物腰とがっしりした体格は、農家にはよい嫁だと思われた。

女たちは家のなかに消えたが、父の庄作と英治は、野良着のまま周三のとなりに腰かけた。庄作はいくぶん痩せたようだが、思ったより年をとらない。五人の子を残して女房——つまり周三たちの母に先立たれた男としては、その気苦労の影さえ見えぬたくましさがあった。たしか、村会議員もやっているらしい。

「戦争はどうなんだや」

「アメリカは本土上陸するんだべかのお」

庄作と英治の口をそろえた質問に、「うん……」と周三は口ごもった。

「あれは何だい」と周三は兵士たちのたむろす方をあごでしやくった。

「ショウコンユ作ってるんさ」

「ショウコンユ……」

周三は思わず聞きかえしたが、考えてみると、たしか外地で、松の根から油を取るといふ「松根油」の呼び名を聞いたおぼえがある。

原油の海路輸送を断られた日本軍は、戦いなかばで、すでに極度の燃料不足となつて、航空隊などはてきめんに困窮した。そこで苦肉策として考えられたのが、この松根油であるらしい。

松の根を煮て、浮いた油をすくい取るといった素朴な製油法である。もちろん、工場で最終的に精製されるのだろうが、それにしても、どれだけ量の産があり、また植物性油からいかにほど高性能の燃料が得られるのだろうか。敗戦はこんなところにもあつたのだ。

ユキがお茶を入れてきて、「兵隊さんもお茶にしませんか」と声をかけた。

白の開襟シャツに霜降りのズボンの若者たち。戦闘帽に線の入った下士官に率られるように一

列に並んで、ユキからうやうやしく茶碗を受けると、彼らは庭先にしゃがんだまま、茶をすすった。

「記者さんだそうでありますね。沖縄はどうなつたんでありますか」と下士官が周三にたずねた。

沖縄では、すでに二カ月ほど前に日本軍が全滅しているのだ。兵士たちはそれさえも知らされなかったのだろうか。

「敵の本土上陸は、やっぱり九十九里浜でありましょうか……そうなれば、自分らもこんな油づくりなどしていられますよ。船も鉄砲もない海軍なんて、うんざりです」と下士官は笑いかける。

みな戦争は、まだながく続くものと信じている。だが、それぞれ不安なのだ。ラジオや新聞に出ない「何か」を知ろうとして、矢継早やにたずねられるのに、周三はただあいまいに答えていた。

「明日、十五日で無条件降伏するよ」といつてしまえば、事は足りるのだ。だが、彼らは戦場はま

だはるか彼方にあると思っている。とても、そうあつてなく敗れたとは信じないだろう。この山村には、なお神州不滅の宗教にすぎる素朴な人びとの姿があつた。

結局、周三は口をつぐんでしまった。

暮色が垂れこめて、澄んだ空をツバメが気ぜわしく飛びかっていた。

燈火管制用の暗幕が垂れているので、夕餉の膳をかこむ人の顔だけが明るく照らし出され、いつもむし暑さをさそつた。

海軍の兵士たちは、台所に即席のテーブルをつくって食事をしていた。ここでも、話題はしぜん戦争のことになるのだが、それでも、一日の仕事を終えたものの、なごやかないつときの憩いがあつた。

そのとき、演芸放送をしていたラジオが、それを中止して臨時ニュースを報じた。

東部軍管区司令部発表 日本十四日夕、B 29ヲ主力トスル敵ノ爆撃編隊ハ、九十九里浜沖ヨリ本土上空ニ侵入、引続キ西南西ニ進路ヲトリツツアリ。栃木、群馬、埼玉方面ハトクニ嚴重ナ警戒ヲ要ス

ニュースは、二度くり返し放送された。

「また来たんかや」と庄作があきれた口ぶりであった。

「この辺もちよいちよい空襲があるんですか」

「あるさ。一カ月に一度ぐらいはな……前橋だつてずいぶん焼けたで」

東京をはじめ、主要都市を焼きつくした米航空隊が、しだいに地方の小都市へその鋒先を向けたとは聞いていた。これでもか、これでもかと、執拗に迫る敵の顔が見えるようである。

明日は日本が降伏する日となるだろう。アメリカをはじめとする連合軍側も、すでに数日前から日本の降伏意図は知らされているはずである。だ

がその最終の瞬間まで、いつてみれば、息の根を絶つまで容赦なく痛めつける非情——これが戦争というものであるう。

膳をかこむ人びとの話が途絶えたとき、遠くかすかに爆音らしいものを聞いた。一瞬みなは箸をはこぶ手を止めて、聞き耳をたてた。それは、最初にぶい断続音だったが、しだいに重くたしかな音量となった。

半鐘が鳴りだした。

「そら来たぞ」と庄作がおどけた笑顔で立ちあがった。家のものも兵上たちも、いっせいに立ちあがった。

「周兄ちゃん、稲荷さまのところに防空壕があるかな。電気消すよ」

英治の声がして、電灯が音をたてて消えた。人びとは、闇のなかで心得たふうに履物をさがし、庭を横切つて、うらの杉森の方へ走った。

周三は、闇をさぐりながら、外の星明りでぼん

やり見える玄関脇の格子窓に近づいた。爆音は夜のしじまをふるわせて、ごうごうと迫ってくる。

「どうしたの、周兄ちゃん。早く、早く」ユキが引返してきて、闇のなかで心配げに声をかけた。

「ああ。いま行く」

「早くよ」とユキの足音があたふたと遠ざかる。

機上のアメリカ兵が、いたずらでもないかぎり、こんな山村に爆弾を落すはずがない。周三は彼らの確な爆撃技術をいくつか見てきているのだ。

爆音が地軸をふるわせて頭上に迫った。いや、頭上といってもかなり離れているはずである。空を仰いでみても、冴えた星くずが眼に入るだけでもちろんその姿は見えはしない。

爆音はしだいに遠くへ行った。だが、その余韻は長く残って、障子を音をたててゆすった。しばらく何事もないように見えた。

すると、はるか闇のかなたでぼつと明るくなり

その明りは一面にひろがっていった。やがて連続する爆裂音が、ひと塊りの巨大な音量となって夜空にこだましながら襲いかかった。

距離があるので、燃えあがる炎は、ゆつくりと明滅しながらひろがってゆくように見える。かなり大きな町らしい。

「伊勢崎だな、あれは——」

「いや、まちつと遠いな。熊谷辺じゃねえかい」
遠い暗がり、人びとのざわめきが聞こえる。

周三は、格子戸のひんやりとした鉄棧にほほを押しつけるようにして立ちつくした。ときおり巨大な火柱がゆらゆらと冲天に舞あがって、周三の顔を照らし出した。

遠い火事を見るように、それは一見美しくのどかな風景をさえ錯覚する。だが、あの炎の下には、爆風に飛ばされた死者、火炎に包まれた悲鳴、逃げまどう婦女子——やりきれない血みどろの修羅場があるはずだ。

今宵日本のほかのどこかでも、同じような悲劇がくり返されているかも知れない。そして、それは勝ちほこったアメリカの最後の置土産となるだろう。

日本政府に不測の変異がないかぎり、明日はすべての戦闘が停止するにちがいない。

戦争に敗けるということ——無条件で国土が占領されるというような事態について、日本人は、かつて歴史から何も教わっていなかった。

戦いが止んだとき、人びとはどうするだろうか。多くの人は、まずほっとした解放感にひたるだろう。そのあとで、降伏という事態に自分のおき所を考えてうろたえるにちがいない。日本の将来、ひいては「自分らはどうなるだろう」という目標を見失ったものの不安が、人びとの脳裏にのしかかってくるだろう。

周三自身、何もわかっていないのだ。

ただ、職業がら直接戦いの場を歩き、また東京

での情報から、敗けるべくして破れた日本の実態に多少とも納得がゆくものの、それでいて、明日の降伏という現実さえも、まだ実感として受けとめることができないのである。

降伏が決定的となったのを見とどけたとき、周三は故郷に帰ってみたいと思った。いつも思い出のなかにある故郷の山河に触れて、混乱した頭を冷やしたいと思ったのだ。東京を去るとき、あの飄逸な画家白木が、「お前逃避するのか」といった声が、みように頭にこびりついて離れない。

遠い町の炎はますます明るさを増していったが、山村はひっそりと涼風が感じられてきた。

やがて、空襲解除の半鐘がゆっくり響いて、人びとのざわめきが近づいてきた。

夜鳥にでも襲われたのであろう、カーと悲鳴に似たヒグラシの声が、闇のなかでした。